

佳作

祖父の言葉

神奈川県立花学園高等学校一年 清水健太

八月二十四日は祖父の六年目の命日です。祖父はいつも僕に口癖のように言いました。

「健ちゃん、勉強しなさいよ。勉強して損する事は一つも無いんだよ。じいじだって、今でもまだずっと勉強し続けているんだよ。」

でも、なぜか母から、

「勉強はしたの？宿題はやったの？」

と言われると聞き流してしまうのですが、祖父の言葉には素直に聞ける不思議な力がありました。反発心や、またかという気持ちにはならなくて、自然に素直に聞ける気がしました。

祖父は大学で近代経済学を教えて、大学の名誉教授になって、大学を引退してからもいつも本の翻訳をしたり勉強をしていました。読んでない読みたい本が、まだまだたくさんあると、祖父はよく僕に言っていました。

祖父は肺の病気で、肺の機能が弱ってしまい十五年以上常に酸素の管をつけていましたが、それでも引きこも

るわけでもなく、携帯用の酸素を引きながら、僕をよく書店に連れて行ってくれました。僕はそんな祖父が大好きでした。

僕はこう思っていました。八十歳過ぎているので、もっとのんびりゆったり遊んで暮らせればいいのに。しかし祖父は違いました。テレビで知らない地名が出ただけで、すぐに本格的な世界地図や資料を広げて確認したりして、知らない事を学べたと言って、僕に説明をしながら満足げな笑顔で喜んでいました。

僕が小学三年生の秋に、祖父のがんが見つかりました。末期がんで三カ月もたないと言われました。

僕は毎日のように、宿題を持って祖父の病院へ行き、祖父のベッドの上で学校の宿題をしたり、笑わせようとふざけたりしました。

僕が勉強をしている姿を見て、祖父を元気にできるかもしれないという思いで、学校から帰ると宿題を持って祖父の病院へ通ったのです。

入退院をくり返しながら、少し元気になった春には、姉が高校に合格し、祖父も車いすで合格した高校の見学に行きました。祖父はとても嬉しそうでした。しっかり勉強して社会の役に立つ人になりなさいと、姉に話していました。そんな時の祖父は、まるで生徒に対して心から思いやる先生の様でした。

六月に入り、祖父は段々弱ってきました。母と僕でよ

くドライブに連れ出したりしましたが、祖父の表情から笑顔が少しずつ消えていく気がしました。

僕の顔を見れば、笑顔でおだやかに

「健ちゃん、ちゃんと勉強しないとだめだよ。勉強すれば必ず健ちゃんの未来が広がるんだからね。勉強は新しい事を知る楽しみだから、楽しんで勉強しなさい。」

そう話す祖父が、その頃はなつかしく、また、僕にいつものように話してほしいと思いました。

祖父のがんは祖父の全てを奪っていくように見えま

した。祖父が病院で亡くなる一週間前に、やっと夏休みの宿題を終わらせて病院へ行った時、祖父は本を見ながらノートに何か一生懸命書いていました。祖母が言うには、フランス語の原書とノートを持ってきて欲しいと言われて、それを翻訳していたのです。

僕は一週間後、祖父が亡くなった病院のベッドの横に置かれたそのノートを見ました。何が書いてあるかわからない、必死に書かれた文字でした。

僕は心に衝撃と感動を受けました。祖父がいつも望んでいた「人生は終わりの無い勉強だ」というメッセージを、僕に送ってくれたと思い、涙が止まりませんでした。

僕はできる事なら、祖父のように人に人生を通してメッセージを送れるような大人になりたいと思います。そして、「勉強する事は自分の未来を創り、終わりは無い」

という祖父の信念を誇りに、大切に生きていきます。